

胆沢扇状地における近世の散居集落

——近世初頭における村落構成と家系の復原的研究を中心に——

岡村光展

I はしがき	(1) 近世の胆沢扇状地における耕地の分布
II 地域の概観と古代・中世における耕地の開発	(2) 近世初頭における若柳村の村落構成
(1) 地域の概観と居住の現況	IV 近世の若柳村における各家の分布と構成——寛永18年名請人をめぐって——
(2) 古代・中世における耕地の開発	V 結び(散居地域における中世の在郷と近世的土地保有形態の進展)
III 近世の胆沢扇状地における耕地の分布と村落構成	

キーワード: 散居集落, 近世初頭期, 在郷, 中世の土地保有制度, 同族的紐帯の欠如

I はしがき

日本の散居集落に関しては、第二次大戦前における小川琢治¹⁾の庄川扇状地についての研究をはじめとし、斐伊川下流平野についての草光繁²⁾と高木幹雄³⁾、大井川下流平野における谷岡武雄⁴⁾や筆者の研究等、数多くの成果がみられる。これらの諸氏によって、各地域における散居集落の成立条件や村落の諸機能について、多くの実証的研究が行われてきた。起源に関しても、中世にまで遡及しうることが、ほぼ明らかにされた。さらに、金田章裕⁶⁾は、現在は散居ではない畿内の条里施行地帯や、畿内周辺地域で、奈

良・平安前期、および平安後期において、散村・小村・疎塊村のような分布密度の低い村落形態が、かなり存在していたことを指摘している。このように、散居の成立要因も、単純に、自然条件や開拓時期および開拓様式の相違のみでは説明しえなくなった。

胆沢扇状地についても、すでに第二次大戦前からの研究がみられる。まず、村田貞蔵は胆沢扇状地の詳細な地形分析を行った後、散居の分布範囲についても触れ、とくに風向と、防風林としての屋敷森の機能に注目している⁷⁾。また、山口弥一郎⁹⁾は詳細な現地観察の後、分家を出しても散居が維持されてきた要因として、「わせ

1) 小川琢治「越中国西部の荘宅について」地学雑誌312, 1914.
 2) 草光 繁「扇川平野の村落景に関する形態学的研究」, 地理学評論 6—8, 1930, 45—61頁。
 3) 高木幹雄「散村の成立と機能」, 人文地理10—4, 1958, 32—44頁。
 4) 谷岡武雄「大井川扇状地における散居集落—その起源と集落型の継承に関する若干の考察—」, 史林56—3, 1973。同「歴史地理学」古今書院, 1979に所収, 195—232頁。
 5) 岡村光展「大井川扇状地における近世散居集落の展開」, 人文地理25—3, 1973, 1—31頁。
 6) 金田章裕「条里と村落の歴史地理学的研究」, 大明堂, 1985, 339—396頁。
 7) 村田貞蔵「胆沢扇状地の形態学的研究」, 地理学評論15—2, 1939, 52—65頁。
 8) 村田貞蔵「胆沢の景観に関する若干の記録」, 地理学評論15—9, 1939, 57—74頁。
 9) 山口弥一郎「陸中胆沢における散居とその生活」, 地理学評論17—5, 1941, 1—21頁。

だ(屋敷地周辺の肥沃な土地)」の確保をあげている。戦後では、散居地域の中での共同体の機能を論じた西川¹⁰⁾ 治、扇状地の開発過程や豪族屋敷の分布を指摘した池田雅美等¹¹⁾による研究があげられる。

しかし、胆沢扇状地を含めて、散居集落に関しては、解明されるべき点がなお多いと筆者は考える。それは、このような居住様式をもって耕地開発の端緒を開いたと考えられる古代・中世において、あるいは、新田開発をもって一層の耕境の拡大をみた近世において、居住の分散形態が土地制度史上もしくは村落社会構造上、いかなる役割を果たしたのかという基本的命題には、未だ十分に答えられていないからである。村落の単なる形態論にとどまらず、機能論的アプローチを行うべきことは当然であろうが、かかる方法論を、現在の村落に対してのみでなく歴史の各時代における、さまざまな居住様式に関しても適用すべきで、したがって、いかなる共同体的諸関係が存在したかにまで研究を踏み込むべきものと筆者は考えている。

この点に関し、歴史学においても、歴史時代の共同体の存在形態についての見解は未だ定まっていらないように思われる。

たとえば、島田次郎による第二次大戦後の中世史学界の展望¹²⁾によれば、中世における耕地と村落の一般的存在形態を谷戸田型村落に求め、領主の個別的支配に属するために在家農民の結合は微弱であったとする永原慶二¹³⁾、前近代社会

においては共同体は不可避との立場から、中世の共同体を名主名田型としつつも、その存在意義には消極的評価をしたとみられる中村吉治¹⁴⁾、これらに対して、荘園貴族による山野領有への対抗者としての村落共同体的結合の意義を評価した戸田芳実¹⁵⁾、辺境における在地領主の所領経営や畿内における座的構成の中で村落共同体を把えた黒田俊雄¹⁶⁾、丹波大山荘や播磨鶴庄の事例をもとに鎌倉期における村落結合を把えた大山喬平¹⁷⁾、さらに摂津榎坂郷における中世の村落構成の詳細な分析をした島田次郎¹⁸⁾など、中世村落における共同体的結合の評価の度合はさまざまである。

村落共同体の形成を近世藩政村以前に求めることは至当としても、中世村落の中にそれを検証することに関しては、結局、なお、実証されるべき余地が残されているため、上述のようなさまざまな見解に分かれるものと、筆者は考えている。

このような観点に立って、村落やその共同体的諸関係にまで遡及的考察を進めるためには、各地域の歴史性に即した手法を採る必要がある。この場合、畿内以外の村落についての最初の手掛かりは、「在家」¹⁹⁾であろう。前述のように、薩摩入来院において迫田に分布する孤立荘宅もしくは小村落を、在地領主による在家の支配形態と把えた永原慶二¹⁹⁾、東国における在家の進化過程を整理した誉田慶恩²⁰⁾などの歴史学における研究成果がみられる。誉田慶恩は古典型在家か

- 10) 西川 治「農村集落の人文生態学的研究」, *Bulletin of the Geographical Institute Tokyo Univ.* No. 3, 1954, pp. 51-96.
 11) 池田雅美「胆沢扇状地における開拓過程の歴史地理的研究」, *人文地理*18-1, 1966. 同「みちのくの風土」, 古今書院, 1981に所収, 111-129頁。
 12) 島田次郎「日本中世の領主制と村落(下)」, 吉川弘文館, 1986, 370-401頁。
 13) 永原慶二「中世村落の構造と領主制」, 稲垣・永原編「中世の社会と経済」, 東京大学出版会, 1962に所収, 151-214頁。
 14) 中村吉治「日本の村落共同体」, 日本評論社, 1956, 178頁。
 15) 戸田芳実「日本領主制成立史の研究」, 岩波書店, 1967, 406頁。
 16) 黒田俊雄「日本中世封建制成立史論」, 東京大学出版会, 1974, 392頁。
 17) 大山喬平「鎌倉時代の村落結合—丹波国大山荘—井谷—」, *史林*46-6, 1963. 同「室町末戦国初期の権力と農民」, *日本史研究*79, 1965.
 18) 島田次郎編「日本中世村落の研究」, 吉川弘文館, 1966, 139-200頁。
 19) 前掲13)。
 20) 誉田慶恩「東国在家の研究」, 法政大学出版局, 1977, 393頁。

ら田付在家(田在家)への進化, すなわち田への永続的保有権を有する在家への進化の過程と、その構造について詳しい考察を加え、さらに在家(田在家)が中世末～近世初頭に解体していく過程にまで論及を進めている。

また、地理学においても、長井政太郎²¹⁾による鬼面川扇状地や山形盆地の周縁部などに現存している在家から成る集落に関する実証的研究、谷岡武雄²²⁾による天竜川下流平野における中世の池田荘に関する研究などがある。長井政太郎は鬼面川扇状地扇頂部の成島十二軒在家、置賜郡の安久津八幡社領の在家、山寺立石寺領の荻野戸六軒在家、慈恩寺領箕輪在家(寒河江市)について、近世初頭の史料と現在の村落構成との対比を行なっている。とくに、箕輪在家の場合には、宝暦3年の史料にみえる各在家の構成が血縁関係の多少にかかわらず、本・分家意識により結ばれていたことを指摘している。また、米沢盆地の元中郷村在家の場合も、明和8年の史料にみえる最大8町歩もある在家地は、当時居住者が八軒も存在し、これを含めていずれの在家も中世以来の営農の単位であったと推定している。

しかし、成島十二軒在家、安久津八幡社領在家、荻野戸六軒在家、箕輪在家の場合、寺社領(とくに寺社に近接するものが多い)であり、寺社に負担する諸役・諸行事を通して、これらの在家が長く存続したことが考えられる。したがって、直ちに一般の在家にまで適用できるかどうかは疑問である。また、元中郷村の場合も、近世中期の史料にみえる在家地の構成から、中世末・近世初頭もしくはそれ以前の在家の構造

まで把握できるかどうかは、なお疑問である。

結局、かかる優れた研究を通して、在家とは何か、という本質的命題に関しては、なお、曖昧な点が残されているように思われる。畿内の「名」に代わって辺境地域の史料に頻出する中世の在家は領主側による賦役收取の単位であることには間違いないから、史料上の在家の背後に存在した村落の実態、もしくは、村落共同体的諸関係こそが究明されるべきではなからうか。在家とは、領主による水田・畑・宅地の統一的把握なのか、親族共同体なのか、若干の眷族を含む家父長的共同体なのか、それとも、単純に家族なのか、今後解明されるべき問題は多い。さすれば、かかる史料の背後にひそむ村落の実態を究めることこそ、我々の課題であり、それを通して、在家の本質も解明されると、筆者は考えている。

さて、以上のような見解に立てば、村落の遡及的研究とは個々の家系を可能な限り辿り、その当時の家屋の位置関係や、その集中もしくは分散の状態を把握し、古い同族関係を復原する等の手段によって、村落共同体的諸関係の態様を推測する以外に、方途は無いように思われる。もともと民俗的性格の濃い村落共同体的諸事象に関しては、史料の残存が期待できないからである。上述のような手続きを踏むことにより、確実に遡及しえた時期の、一つ前の時代の状況に関して、かなり正確な把握がなしうるものと、筆者は考えている。Mayhew²³⁾のドイツの農村集落発達史によっても高く評価されている西南ドイツを事例としての耕地区画の復原から人口増加の傾向と三圃農法の発達および集落形

21) 長井政太郎・工藤定雄「在家と村落」、山形大学紀要3-4、1957。小林清治編『東北大名の研究』、吉川弘文館、1984年に所収、306-364頁。

長井政太郎「開拓過程の歴史地理学的研究—鬼面川扇状地を例にして—」、歴史地理学紀要7「開発の歴史地理」、1965年に所収、5-23頁。

22) 谷岡武雄「天竜川下流域松尾神社領池田荘の歴史地理学的研究」、史林49-2、1966。同「歴史地理学」、古今書院、1979年に所収、85-123頁。

23) Mayhew, A., *Rural settlement and farming in Germany*, B. T. Batsford Press, London, 1973, 224p.

態の変遷とを究めた Krenzlin²⁴⁾らの業績などにその例がみられよう。

以上のような視点に基づいて、筆者は胆沢扇状地の散居集落に関しても、調査地区の家系や本分家の系統を可能な限り辿り、当時の屋敷の位置関係の復原に努めた。

II 地域の概観と古代・中世における耕地の開発

(1) 地域の概観と居住の現況 村田貞蔵²⁵⁾によれば、大部分が更新統の地質に属する胆沢扇状地は、6つの崖により、東西方向の7段の面に区分される。斉藤亨治²⁶⁾も、同じく7段の段丘面に区分している。これらの既往の研究をまとめた池田雅美²⁷⁾によれば、段丘は南から高位段丘面(一首坂段丘面)、中位段丘面(胆沢段丘面)、低位段丘面(水沢段丘面)の三つに大別される。そして、ロームの堆積と開析の進行は中・高位面の地形・地質を複雑にしている。

このような複雑な地形に対応して、開発の歴史もまた多様である。比較的古くから耕地開発の行われた低位段丘面に対し、中・高位面、とくに南西部では、戦後の胆沢開拓を待って、初めて耕地化された地区も多い。今日、中・高位面の地区においては、畜産を組み入れた複合経営²⁸⁾が活発に営まれており、同じ散居形態でありながら、水田経営を主とする低位段丘面地区とは対照的な景観をなしている。

このような扇状地における人間居住の現況はどうか。この点について、次に、検討を加えた

い。筆者は、まず、1976年撮影の約8千分の1航空写真から家屋を検出した後、これに一边が12.5 cm (1 km)の方眼をかけた。この際、対象地域の北限は胆沢川、南限は一首坂段丘面の南端から白鳥川谷を結ぶ線、東限は東北自動車道、西限は扇頂部の愛宕原付近とした。この範囲内において航空写真から検出しえた戸数は3,510である。なお、同年度の胆沢町住民録における戸数は、小山地区1,945戸、若柳地区1,300戸、南都田地区953戸の計4,198となっている。航空写真からの家屋検出に際して、4集居部(元木、供養塚、愛宕、高橋)を除外したことを勘案すれば、両者はほぼ一致するものと思われる。次に、対象エリアの方眼のうち、完全な樹目73個に含まれる戸数は2,626であるから、集居部を除いた家屋密度の平均は1 km²あたり36戸となる。

筆者は、すでに、大井川扇状地の散居集落に関して、当時の1 km²あたりの家屋密度を37~65戸と計測しておいた³⁰⁾が、これに比してもかなり低い。ただし、胆沢扇状地に関して、方眼を大きく、上位段丘面、中位段丘面、下位段丘面に区切ってみると、それぞれ、25戸、38戸、43戸と明瞭な差を示しており、水田経営が古くから行われた低位段丘面においては、より密であると言えよう。したがって、一般に、わが国の水田地域における散居集落に関しては、1 km²あたり40~50戸程度が都市化の波を蒙る以前の家屋密度であると言えよう。これとは対照的に、上位段丘面および中位段丘面における

24) Krenzlin, A. and Reusch, L., 'Die Entstehung der Gewinnflur nach Untersuchungen in nordlichen Unterfranken', *Frankfurter Geographische Hefte* vol. 35, 1961, pp. 17-26.

25) 前掲7)。

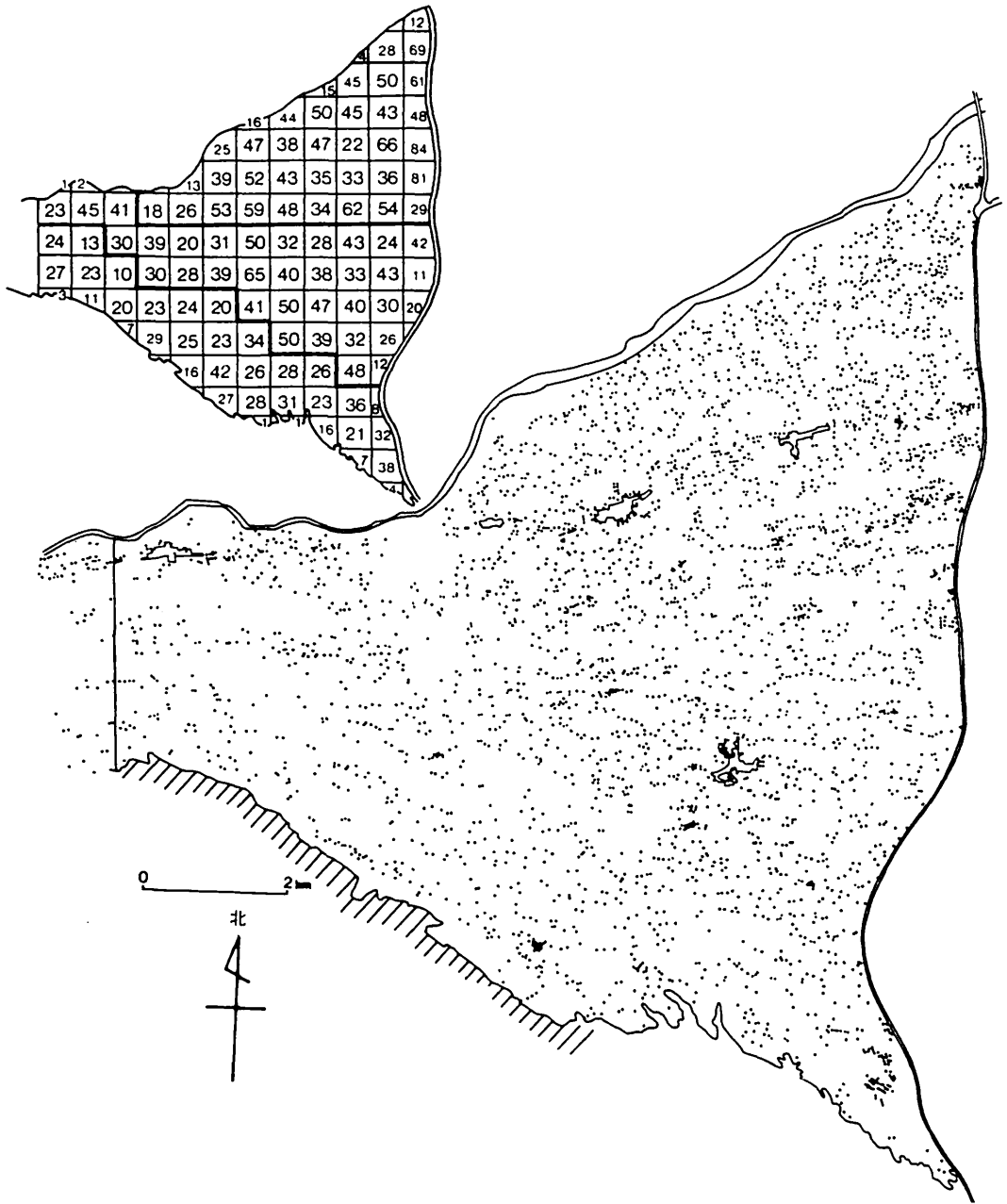
26) 斉藤亨治「岩手県胆沢川流域における段丘形成」, *地理学評論* 51—12, 1978, 852—862頁。

27) 前掲11)。

28) 大原由起子・中田 勝・柳沢孝子「胆沢扇状地における散居集落」(新潟大学教育学部地理学岡村研究室調査報告書『胆沢扇状地』, 1984) 23頁。熊倉隆司・田中いく子・広瀬吉生「散居集落における複合経営」(同『胆沢扇状地Ⅳ』, 1987), 33頁。

29) 白井孝一・野崎真二・山崎浩志「胆沢町低位段丘上集落における農業経営」(新潟大学教育学部地理学岡村研究室調査報告書『胆沢扇状地Ⅲ』, 1986), 33頁。

30) 前掲5)。



第1図 胆沢扇状地における家屋の分布と1km²当りの家屋数(左上)

(注) 1977年撮影の航空写真より検出。

家屋密度の低さが、米の減反政策下の今日、複
合経営の推進を支えている側面も見落とすこと
はできない。

(2)古代・中世における耕地の開発 岩手県
における弥生遺跡³²⁾の分布は北上川流域に集中し
ているが、胆沢扇状地の低位段丘面から県下で

31) 前掲28)。

32) 青森県の垂柳遺跡からの水田遺構の発見により、東北地方の米作は、弥生中期からすでに始まっていたことが認められている。

初めて石包丁が出土する³³⁾に及び、胆沢扇状地の一部で、当時稲作がおこなわれていたことが確實視されるに至っている。後に、このような肥沃な穀倉地帯をめぐる、坂上田村麻呂の律令体制軍とそれに抗したアテルイ軍との一大争乱の舞台³⁴⁾となったのも、北上川を挟む水沢市と江刺市の平野部であった。律令体制軍に激しく抵抗した多数の村々の位置³⁵⁾からも、当時の生産の舞台が北上川兩岸の平野部や低位段丘面であったことがわかる。

この争乱の後、著名な水沢市の胆沢城、次いで盛岡市の志波城、最後に矢巾町の徳丹城が造営³⁶⁾され、古代東北地方経営の拠点とされた。ただし、これらの他にも、「方八丁」関係の地名は北上川流域にいくつか残存している。胆沢扇状地においても、低位段丘面上の胆沢町南都田字元木の「角方」(カッコまたはガッコと呼称)と中位段丘面上の同町小山の「方齊」(方八丁と齊藤が合併したもの)の2つが残っている。これらは胆沢城の支城的性格を有するものと考えられ、前者については、古老への聴き取りによっても、また、戦前の地形図からも、かつて明瞭な方格状地割が残存していたことがわかる。時代は遡るが、角方の真南³⁷⁾に位置している角塚古墳も古代の景観の一つであろう。

古代律令体制の解体以降の中世における土地開発を知る史料は少ない。考古学の成果³⁸⁾によれば、胆沢扇状地において、中位段丘面上の占拠(東北自動車道寄りの末端部に多い)がみられるの

は平安時代に入っていることである。場所は変わるが、著名な中尊寺経蔵別当領の骨寺絵図³⁹⁾は中世後期における農村景観を示している。そこに描かれた姿は、基本的には、今日の一関市本寺地区⁴⁰⁾のそれとも変わらず、13の在家(うち2つは在家跡)も現在の農家の位置とほぼ一致している。

胆沢扇状地における耕境も、後述のように、中世末・近世初頭と明治初頭とを比較しても、大きな差違はなかった。さらに、岩手県内にも広範囲に分布している在家地名も中世の耕境を知る手掛かりになりえよう。安永風土記には、現胆沢町の範囲について、若柳村の中在家屋敷、北在家屋敷、新里村の中在家屋敷、東在家屋敷、西在家屋敷、柳田村の中在家屋敷、北在家屋敷、仲斎屋敷、都鳥村⁴⁰⁾の西在家屋敷の9個の在家屋敷数が記されている。これらは溪口部から低位段丘面にかけての広い範囲に分布しているが、中・高位面から成る小山村には、在家屋敷数はまったく見られない。このように、中世の主要な生産舞台も古代の外延的拡大上にあったことがわかる。もちろん、それは谷戸田型村落ではなく、広い沖積平野部の生産力を基盤としていた。

III 近世の胆沢扇状地における耕地の分布と村落構成

(1) 近世の胆沢扇状地における耕地の分布
本節では、胆沢扇状地における近世初頭から明

33) 1978年に、胆沢町南都田字清水下で出土。稲の穂を摘むもので、1世紀頃のものとして推定されている。水沢市教育委員会「平安時代と胆沢城址」, 1983, 122—123頁。

34) 前掲33)。「平安時代と胆沢城址」, 173頁。

35) 胆沢城址にある八幡神社境内に設置された胆沢城出土品資料館の展示資料による。

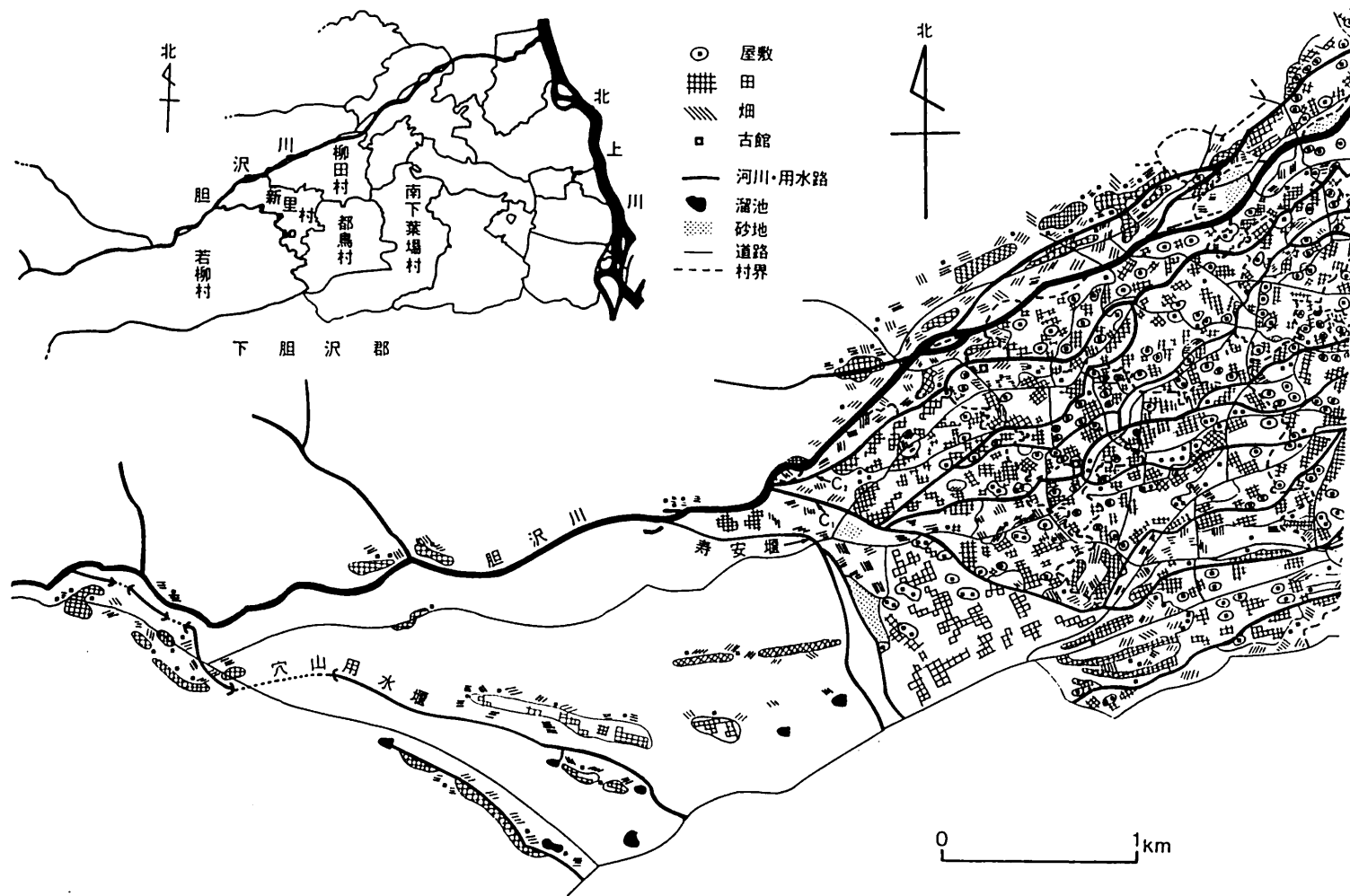
36) 胆沢城は延暦21(802)年に造営、一辺670mの方六丁。徳丹城が初見するのは弘仁5(814)年、一辺は350m。志波城は延暦22年に造営。盛岡市の太田方八丁遺跡がそれであることが、確認されている。一辺872mの方八丁。

37) 花巻市の宮野目方八丁遺跡など。

38) 岩手県教育委員会・日本道路公団「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XI」, 1981, 1—6頁。

39) 豊田 武「東北の歴史(上)」, 吉川弘文館, 1967, 321—324頁。同絵図の複製版は、中尊寺資料館に展示。筆者は、絵図の現地である一関市本寺地区を、1988年10月に踏査した。

40) 「宮城県史」, 第28巻, 1961, に所収。84—98頁。



第2図 元文4年開田絵図

(注)・ただし、絵図は若柳村とその隣接地域のみを図示した。・C¹は茂井羅堰、C²は三堰である。
 ・左上は、同絵図による近世上胆沢郡各(藩政)村の村界(現・胆沢町域のみ表示)。

第1表 寛永18年検地帳

村名	田					
	上々田	上田	中田	下田	下々田	田計
若柳村	5・8・9・13 3.1%	32・1・7・22 16.6%	50・7・6・18 26.3%	82・4・1・27 42.6%	22・0・6・24 11.4%	193・3・2・14 100%
新里村	3・4・4・19 2.6%	27・0・5・13 20.5%	41・5・0・11 31.5%	47・3・8・28 36.0%	12・3・2・07 9.4%	131・7・1・18 100%
柳田村	8・5・1・04 6.7%	24・2・7・26 19.1%	43・7・5・21 34.5%	43・1・8・03 34.0%	7・1・8・18 5.7%	126・9・1・12 100%
上野村	・・・0	9・2・7・29 4.7%	37・8・0・22 19.0%	121・1・2・27 61.4%	29・4・5・22 14.9%	197・6・7・10 100%
小山村	3・9・4・16 4.2%	19・0・9・17 20.1%	27・8・9・25 29.3%	35・2・5・22 37.1%	8・8・7・05 9.3%	95・0・6・25 100%

治初期にかけての耕地の分布状態を、寛永18(1641)年検地帳⁴¹⁾、元文4(1739)年作製の「開田絵図」⁴²⁾および明治13年の岩手県資料⁴³⁾に基づいて詳細に検討したい。

元文4年開田絵図は、北上川右岸の旧上胆沢郡域を南の衣川村境から北は六原台地(現金ヶ崎町)に至るまで、各村境、道路、溜池、用水路、屋敷、耕地の分布状態を克明に描いている。そのうち、胆沢扇状地の一部分のみを図示すると第2図のごとくである。

絵図には主要な用水路として、近世初頭に開削された寿安堰⁴⁴⁾、それよりも古い三堰および茂井羅堰⁴⁵⁾が明瞭に描かれている。したがって、寿安堰よりも上流部(西方)においては、溪口部に位置する市野々地区、左岸側の鹿合と大歩地区、中位段丘崖下に位置する野山田地区、それに中位段丘面上にあっても穴山用水を受ける萱刈窪地区⁴⁶⁾のみに耕地と屋敷の分布することがわかる。絵図上では島状に孤立するこれらの地区

は、今日でも本家や旧家その集落の核になっていることが聴き取りからも確認できる。これら島状の地区を除けば、寿安堰よりも上手にあたる図中の空白部分は原野・雑木林のままであった。こういう原野・雑木林は、現在の果樹園や畑地の分布範囲ともおおむね一致しており、土壌はクロボク質である。

下胆沢郡に所属するために絵図には描かれな⁴⁷⁾い小山村の大部分もこれと同様の景観であったものと推定される。さらに寛永12年上野村検地帳の屋敷名のうち、部分的にその位置が判明するものや戦前の地形図からも、近世の上野村の耕地は、中・高位面の中でも末端に近い部分、すなわち、現東北自動車道の西南側の部分で、これに平行する方向に多く展開していたことがわかる。かかる場所において、近世には耕地の拡大を見つつも、中・高位面西部の耕地開発は戦後の「胆沢開拓」によるところが大きい。一部の溜池灌漑掛かりや穴山用水堰⁴⁷⁾、および筆名

41) 岩手県立図書館所蔵。

42) 岩手県立博物館において展示中であつたものを、筆者は撮影させて頂いた。

43) 筆者は、その複写版を、胆沢町史編纂室において閲覧させて頂いた。

44) 胆沢平野土地改良区「胆沢平野土地改良区史」、1979、933頁では、寿安堰は当時当地方においてキリスト教の布教に当たっていた寿庵館主の後藤寿庵により、元和年間頃起工されたと推定している。優れた土木技術を用い、水路幅も広い。

45) 上記「胆沢平野土地改良区史」でも、水路の位置や地形上、寿安堰よりも古いことは当然としても、その遡及年代は不明としている。

46) 清水雅以・神能由美子・高橋あけみ・中嶋妙子・吉田 智・高橋 誠「散居集落における耕地と水利」(新潟大学教育学部地理学岡村研究室調査報告書「胆沢扇状地II」, 1985)、20頁。

47) 高度な技術により、長い隧道を掘削しているが、その施行年代は明らかではない。前掲44)によれば、少なくとも、1500年以前。

の地目・等級別構成

（単位は、町・反・畝・歩）

畑（茶畑・屋敷も含む）						耕地計
上々畑	上畑	中畑	下畑	下々畑	畑計	水田率(下段)
・6・4・17 0.5%	4・1・2・03 3.2%	18・5・4・27 14.5%	68・8・6・22 54.0%	35・4・5・06 27.8%	127・6・3・15 100%	320・9・5・29 (60.2%)
2・7・0・20 7.8%	1・8・4・25 5.3%	3・2・4・08 9.4%	15・4・1・10 44.5%	11・4・4・07 33.0%	34・6・5・10 100%	166・3・6・28 (79.2%)
3・6・9・21 18.2%	4・8・4・25 23.9%	4・6・7・18 23.1%	5・0・7・00 25.0%	1・9・8・25 9.8%	20・2・7・29 100%	147・1・9・11 (86.2%)
・・・0	1・5・2・17 2.0%	10・0・7・12 13.3%	49・4・0・24 65.1%	14・9・9・23 19.7%	76・0・0・16 100%	273・6・7・26 (72.2%)
・9・7・22 2.1%	2・7・7・20 6.0%	6・7・2・26 14.4%	28・6・3・18 61.4%	7・4・9・21 16.1%	46・6・1・17 100%	141・6・8・12 (67.1%)

沢用水堰⁴⁸⁾を受水しうる地区には耕地が分布していたが、この二つの用水堰とも隧道の口径が限られるために、耕地はおおむね狭小であった。次に、寿安堰よりも下流域（東方）については、まず、水田は用水路（堰）方向に沿って展開していることがわかる。また、畑が少ないのは、寛永検地帳において「クネハタ」等の地字で登録されている屋敷地周辺の畑が絵図には描かれていないためと思われる。さらに、耕地が連続せず、図中に空白部分が随所に見られるのは、明治初期においてさえ各所に残されていた原野や雑木林が混在しているためであろう。

次に、寛永18年検地帳の地積と明治13年の岩手県資料にみる各村地積との対比から、水田・畑面積とその割合およびその推移を検討したい。

まず、寛永18年において、若柳村の総耕地（屋敷地を含む）320町9反5畝のうち水田は60.2%、^{じつと}新里村166町3反6畝28歩のうち水田は79.2%、柳田村147町1反9畝11歩のうち水田は86.2%と、同じ上胆沢郡内においても、山麓部の多くの狭隘な段丘面や、溪口～扇頂部等を含んでいて若柳村では、水田率が低い。また、下胆沢郡に属する上野村では水田率が

72.2%、^{みで}小山村ではそれが67.1%と中・高位段丘面を占める村々の水田率も低い。さらに、地味の良否を上田率（上田／総田地）によりみれば、若柳村の16.6%、新里村の20.5%、柳田村19.1%、上野村4.7%、小山村20.1%となり、おおむね水田率と同様な傾向が認められる。

次に、田・畑（屋敷地を含む）の面積を寛永18年と明治13年とについて比較したい。明治13年には、水田が、若柳村で208%、^{はるた}東田村（寛永の新里村と柳田村を合したのもの）137%、小山村（同小山村と上野村）268%となっている。畑については、若柳村135%、東田村151%、小山村426%である。また、田畑合しては、若柳村193%（安永年間までの増加率は157%）、東田村140%（同104%）、小山村315%（同215%）である。後述のごとく、若柳村のうちの下若柳分について、寛永検地から明治初頭に至る間に耕地の状態がほとんど変化していないことが判明しているので、下若柳村とそれ以東の低位段丘面に位置する新里村および柳田村に関しても、寛永検地と明治初期との間におけるこの程度までの乖離⁴⁹⁾は、両時期の丈量方法等に起因するものと思われる。これに対し、明治13年の小山村（寛永検地の^{はるた}上野村と小山村）において、耕地増加

48) 前掲44)。同書によれば、一首坂段丘を隧道で貫いて寛文9（1669）年に完成。

49) 東田村と同様な土地条件にある都鳥村と下若柳村について、幕末にも新田實高が僅少であることが判明しているため、東田村についての安永以降の増加率、およそ30%程度が乖離によるものと推算される。

